

海外で活躍する建設コンサルタント技術者が、独特の目線で各国を紹介するコーナーです。

# OVERSEAS

## 海外事情

### UAE: United Arab Emirates



#### アラブ首長国連邦

再掲載

## 魅力溢れるアブダビ首長国でアラブを満喫!

前号で「少しだけドバイ情報」以降を欠落させたま掲載しておりました。読者の皆様に深くお詫び申し上げますとともに、全文を再掲載いたします。



**油谷 百百子** ABURAYA Momoko  
パシフィックコンサルタンツ株式会社 / 総務・労務部 / 広報室長

2019年10月6～10日に開催された第26回世界道路会議および併設の技術展のため、アラブ首長国連邦(UAE: United Arab Emirates)のアブダビ首長国を訪れた。アブダビへは、成田空港からアブダビ国営エティハド航空が運航する直行便で約13時間のフライトである。帰国便は、

台風19号の影響により成田空港が着陸制限を行ったため2日間欠航となり、アブダビでの延泊を余儀なくされた。そこで日本では馴染みの薄いアブダビについて、10日間の滞在をもとに紹介したい。

### 異国情緒を感じる UAE

UAEの伝統的な白装束カンドウーラに身を包み、頭にクウトラを被り、黒い紐アカールを載せた男性たちと黒装束のアバヤを着た女性たち。この姿を見ると、一気に「アラブに来たな」という気分になる。男性が白一色、女性は黒一色という男女共にロングワンピースのような装束は、気温の高いアラブでは風も通るので涼しく、理にかなっている

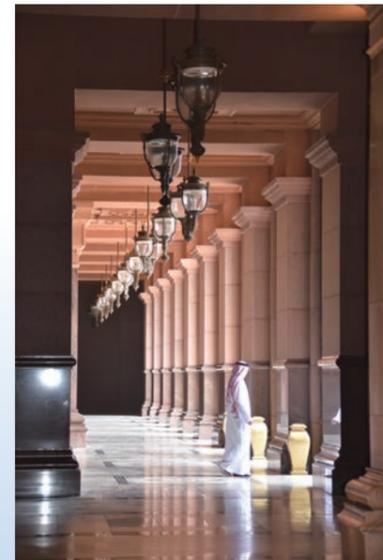


写真1 アブダビの超豪華ホテルエミレーツパレスの回廊にて



図1 アラビア半島とUAE



図2 UAEの地図

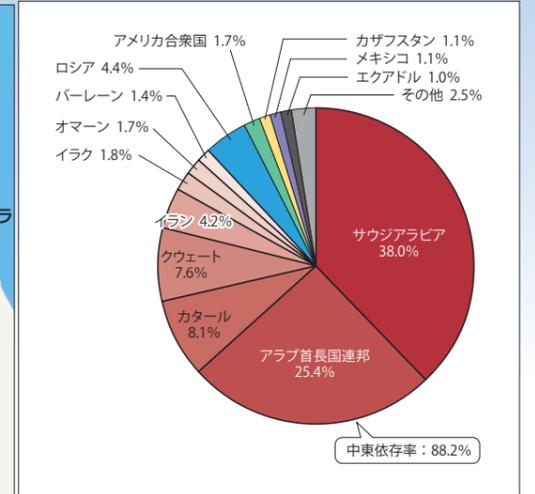


図3 石油統計～日本の原油の地域別輸入比率～(2018年、経済産業省)

のかもしれない。ちなみにカンドウーラは日本メーカーの生地が最高級品として人気だ。

イスラム教の聖典では女性は顔と手以外は隠すように定められている。時折、袖口からその下に着ているドレスがチラリと覗くことがあり、その華やかな色に驚く。女性たちは黒装束の中やバッグなどでお洒落を楽しんでおり、映画『セックス・アンド・ザ・シティ 2』のアブダビシーンを思い出す。

### UAEの基礎知識

UAEはアラビア半島にある連邦国家で、アブダビ、ドバイ、シャルジャ、ラース・ル・ハイマ、フジャイラ、ウムルカイワイン、アジュマンという7つの首長国から構成され、各首長国は世襲の首長による絶対君主制に基づき統治されている。1971年にイギリス保護領から6首長国が連邦国家として独立し、翌年ラース・ル・ハイマが加わり現在の7首長国となった。UAEの国土面積は約

83,600km<sup>2</sup>で北海道とほぼ同じであるが、その内の約80%の67,340km<sup>2</sup>をアブダビ首長国が占め、ドバイ首長国は4,114 km<sup>2</sup>と僅か5%である。

1950年代にアブダビとドバイで石油が発見されたが、ドバイは近い将来に石油が枯渇すると想定されたため、交通の要衝という地の利を活かして港湾や空港を整備し、貿易・観光・商業に舵を切った。

一方、アブダビは豊富な石油と天然ガス資源による潤沢な資金をもとにUAEの首都として確固たる地位を築き、国家予算の8割を捻出し、



写真2 カンドウーラを着た男性たち



写真3 アブダビの街並み



写真4 シェイク・ザイド・グランド・モスク



写真5 貸衣装のアバヤ (右端)

国防費用に至っては全額を負担している。石油および天然ガスの埋蔵量は共に世界7位で、その大半をアブダビが保有する。また日本の原油輸入比率の25.5%をUAEが占めており、UAEにとっても日本は最大の原油輸出国となっている。

UAEは多数の外国人の就労を認めているため、居住者の9割が外国人という世界有数のグローバル国家である。1割のUAE人は、ほぼ政府機関に就職し高額な給与を受け取り、教育と医療費は無償、結婚時の住宅購入資金支援、規模の大き

い外国企業には一定数のUAE人の雇用を義務付けるなど、国として自国民に対し様々な優遇制度を設けている。

### アブダビの街並みと巨大モスク

UAEの中で最も国土が広く、資源の豊富さから潤沢な資金を持つアブダビは、ドバイほどの派手さはないが市内には大型ビルが立ち並び、主要な道路は整備され路上駐車もない。スーパーマーケットや飲食店も多く、日中であれば女性1人の外出も問題ない。アブダビからド

バイに通じる片側4車線や6車線の一直線の高速道路を走ると、すぐに左右は砂漠となる。道路の両脇にはラクダが入り込まないよう衝突防止柵があったり、一定の間隔で国営のモスク付ガソリンスタンドがあったりするはこの地特有だ。アブダビやドバイでは少し郊外に出るとラウンドアバウト(環状交差点)を多く見かける。豊富な土地(砂漠)と直線道路が多いこの地では、スピードの出しすぎによる事故対策と、方向転換の方策としてラウンドアバウトが取り入れられているようである。



写真6 ドバイのバスステーション



写真7 ドバイからシャルジャへ向かう途中の渋滞



写真8 シャルジャの街並み



写真9 デザートサファリ一列に並んだ4WD

1日5回コーランが街中に響き渡るアラブの国では、各所にモスクがあるが、異教徒の出入りを許可しているところは少ない。その中で2007年に建てられたアブダビのシェイク・ザイド・グランド・モスクは、UAEでは数少ない異教徒でも内部を見学することができるモスクで、建国の父ザイド・ビン・スルタン・アル・ナヒヤンが眠る4万人収容の巨大なイスラム教の礼拝堂である。入場する際には離れた建物の地下を通り、名前や国籍などを登録する。その後、係員による服装チェックがあり、髪の毛や肌が出ていたり、派手な服装の女性は、通路脇の更衣室でアバヤの着用を指示される。伝統的なイスラム建築と近代建築が融合したとされるモスクはその大きさに圧倒され、ライトアップされた夜はより一層幻想的である。

### 首長国間の移動手段

UAEにはドバイメトロ以外に鉄道がないため、主な交通手段は車であり、多くの人が首長国間の移動手段として長距離バスを利用する。アブダビからシャルジャ首長国へ行く場合は、直行便は1日数本に限られるため、本数の多いドバイ行きに乗り、ドバイで乗り継ぐ必要がある。ドバ

イでは中心地から離れた場所にバスステーションがあり、そこからシャルジャへ行くバスに乗り継ぐ。バス停の場所、行き先、発車時刻の表示がないため、その都度係員に確認する必要がある。後から分かったことだが、ドバイにはバスステーションが2つあり、それぞれ行き先が異なる。シャルジャからの帰りの乗り継ぎでは、タクシーでもう一つのバスステーションへの移動が必要となり、日も暮れていたのが不安になった。

バスステーションは夕方以降になると混んできたが、居住者以外は見かけなかった。バスの車内は、男女が分かれて座ることが暗黙のルールになっており、前方に女性、後方に男性が座るようである。乗り込んで席を探すと、何も言わずに男性が一番前の席を譲ってくれた。ちなみに、バスのチケット購入窓口も男女別であった。

### 第3の首長国シャルジャと悪徳タクシー

UAEの中で3番目に大きな首長国シャルジャは、ドバイから15kmほどの距離にある。ドバイへの通勤者が多く住むとのことだが、ドバイとシャルジャを結ぶ主要な道路が1

本しかないため、交通量が多く渋滞により1時間以上かかることも多いという。19世紀後半にはアブダビと地域の主導権争いをするほどの力を持っていたシャルジャだが、石油埋蔵量が少なかったことから現在は工業と観光産業に頼らざるを得ない状況のようだ。

また、シャルジャはUAEの中で最も厳格なイスラム教国とされ、酒類の販売や飲酒が禁止されており、学校でも男女は分かれている。アブダビやドバイに比べると古びた建物ばかりで人通りがなく閑散としており、女性の姿を見かけなかった。日中に女性2名で中心部を歩いたが、長袖ロングスカートにも関わらず、商店の前に座っている男性グループにじっと見られるため居心地が悪かった。

イスラム文明博物館から街の観光名所セントラル・マーケットに移動するため、タクシーに乗ったところ、不運にも悪徳タクシードライバーに捕まった。車を出した直後に運転手が「目的地が分からない」と言い出したのである。車を止めて早々に降りたところ、僅か5mの料金を支払えと運転手が声を荒げてきた。無視をして車の進行方向とは逆に歩き出したところ、車で追いかけて

来た。車の入れない細い路地に入り大通りに出ると、今度は車を停めて走って追いかけて来る。しつこく追いかけてきたことや顔を近づけてバッグに手を入れようとしてきたことから安全を第一に考え、やむを得ず料金(200円弱)を支払った。あまりに腹が立ったので支払い時に運転手を撮影しようと思ったが、スマホを壊されても困るので断念した。

後日、ドバイ在住の方にその話をしたところ「タクシーのナンバーの写真かレシートを、警察に届けるとよかったのに」と言われた。悪質な営業として運転手に罰金が科せられ、3回繰り返すと就労許可が取り消されるため、労働者はそれを何より恐れるとのことである。直接対峙せずとも対処法はあると勉強になった。ちなみにレシートは運転手に取り返された。

### 砂漠を体感するサファリツアー

アブダビやドバイに行ったら是非とも参加したいのがデザート・サファリツアーである。ホテルまで迎えに来たランドクルーザーに乗り、片側6車線の道路をしばらく走ると、見渡す限りの砂漠地帯が現れる。砂漠地帯の道なき道を走ると、ツアーのスタート地点に到着する。ツアー



写真10 デザート・サファリツアー

に参加するランドクルーザーが砂漠にずらっと並んだ姿は圧巻で、そこから隊列を組み順番に砂漠を滑り落ちるように豪快に走っていく。斜めになったサンドベージュの世界で、時間軸が吹っ飛ぶ。

砂漠の中に突如現れたキャンプサイトでは、ラクダに乗ったり、現地の衣装を着てみたり、サンドサーフィンも楽しむことができる。夕食時にはベリーダンスショーがあり、ラストは参加者も舞台上がり砂漠での楽しい夜を満喫できる。

なお、外務省HPでは、中東呼吸器症候群(MERS)の感染源である

可能性の高いラクダとの接触やラクダの未加熱肉などを食べることを避けるよう注意を呼びかけている。「地球の歩き方」でも見た記憶はないが、外務省のHPには出ているのでご注意ください。

### さっぱりして食べやすいアラビア料理

アブダビでは、アラビア料理としてレバノン料理やトルコ料理、イエメン料理がよく食べられている。出稼ぎ労働者が多いためだとされるが、ハーブ類を使った料理が多く、スパイシーだが辛さはなく爽やかで食べ



写真11 全員参加のディナーショーのラスト



写真12 キャンプサイトのラクダ



写真13 前菜のフムス



写真14 前菜のタブーレ



写真15 渡し船アブラ



写真16 ドバイの噴水ショー

やすい。

前菜で定番とされるのが「フムス」というひよこ豆をペースト状にしたもので、ディップ(クリーム状のソース)のようにパンや野菜につけて食べる。「ムタッパル」という焼きナスをペースト状にしてヨーグルトレモン汁で味付けしたディップもある。また、パセリやトマト、玉ねぎを細かく切った「タブーレ」や、「ファットウシェ」というキュウリ、トマト、ピーマン、レタス等のサラダはどちらもレモン汁と塩、オリーブオイルで

味付けされ、さっぱりしていて美味しい。前菜だけでも気分が上がる。メイン料理は日本でもお馴染みのケバブや、ハモールというクエの一種の白身魚のグリルなどがある。どの料理もあっさりしていて日本人好みの味である。

### 少しだけドバイ情報を

日帰りでドバイを訪れたが、旧市街と中心部を流れる入江の渡し船「アブラ」は長閑な雰囲気の中でドバイの景色を楽しめるのでお勧めで

ある。「これぞドバイ!!」を堪能したい方は、ドバイ・モールを囲む人工湖で行われる噴水ショーとその周囲の夜景は必見だ。

余談になるが「アブラヤ」という私の名前に現地の方々は「どこから来たのか? それはアラビアンネームだ!」と興味津々だった。

### <参考文献>

- 1) 加茂佳彦 2017 「日本人だけが知らない砂漠のグローバル大国 UAE」 講談社+α新書
- 2) 「地球の歩き方 ドバイとアラビア半島の国々 2018-2019」 ダイヤモンド社